

# St. Mawr : ルウの求めたもの

内 藤 歡 修

第一次世界大戦中、戦争に対する非協力的な態度や妻フリーダがドイツ生まれという理由で官憲から受けた迫害に対する怒りを振り払って、戦争終結を待ち構えたように母国イギリスから逃れて行ったD.H.ロレンスは、イタリアなどに2年間滞在した後、セイロンやオーストラリアを経由して1922年9月にアメリカ大陸に到着した。その後ロンドンに数ヶ月戻ってはいるが、約3年アメリカに滞在した。彼の心にこの滞在がどれ程大きな衝撃を与えたかは、そこに題材を選んだ作品、旅行記や小説などの量や質を考えれば十分に想像できよう。

この間、自分の精神文化が根付くヨーロッパ、特に母国イギリスに対する憎悪に近い嫌悪の気持ちから、別の文化を背景に自己の精神の再生を計り、様々な試みをしたにもかかわらず、それが成功したとは考えられない。当時書いた作品 *The Princess* (1925), *The Plumed Serpent* (1926), *The Woman Who Rode Away* (1928) 等の中で、ロレンスはヨーロッパ文明の人間とメキシコの人間や風土との葛藤を緊張感溢れる筆致で描いているが、結局ここで思想的に新しい境地を開拓し、見出したとは言い難い。ヨーロッパ世界を嫌い別の文明世界に暮らしても最後までヨーロッパ人であることを止められなかったところにその失敗の原因があろう。

自分の精神が袋小路に入り込み、転機が訪れなければ、これ以上の精神の発展はないという思いを抱えていた、この頃のロレンスは *Women in Love* (1920) 以後作品中に異国人を神秘的な生命を持った人間として登場させることが多くなる。特に大戦後の作品にその傾向が顕著に見える。これは単に接する社会が拡大したという外的理由によるだけでなく、同じ血を持つ、同じ文明の中で育った人間の本質を見抜いて絶望したという意識から、異質の生命の神秘を求める衝動によって、ヨーロッパ文明以外の世界へイギリスから逃れ出て行ったのだとも言えよう。彼の意識では既に生命の神秘をイギリスに求められなくなっており、創作活動も困難な状態に陥り、異国への脱出という願望に繋がって行ったのである。

長編に近い中編小説と言ってよい *St. Mawr* を一読すれば、以上述べたことがこの作品の中に描かれていることがよく分かる。徹頭徹尾イギリス嫌悪という一念を以て書かれているが、その対極に神秘のものとしてロレンスが捉えたアメリカ大陸という新世界が提示されている。イギリスとアメリカという2つの項目の捉え方は相互に関連し、一方が他方を生み出す母胎となっている。ヨーロッパ文明の行き詰まりを認識すればする程、イギリスへの嫌悪感は深まり、異国への関心は高まって行く。*St. Mawr* はイギリスに嫌気がさしてアメリカに逃

れ帰って来るコスモポリタンの母と娘を中心に置いた物語である。しかしその舞台は一部アメリカを題材にしているが、イギリスを舞台にしている部分が主となっている。St. Mawrの殆どの部分がイギリスを舞台にしているが、そこではヨーロッパやイギリスの人間や風物は当初から唾棄すべきものとして存在しており、本質的な人間のドラマが成立し得ないという前提に立っている。作者は人間以外のものを登場させ人間を動かそうとしている。それがSt. Mawrという種馬で、この馬に動かされる人達は唾棄されるべき人間と彼らを軽蔑している人間の両方である。この2種類の人間の行動は活発でない。馬と出会ったのを契機にして交流し合うというのではなく、逆に馬をどう見るかという相違からますます離れ対立してしまう。馬によって人間ドラマが喚起され物語が進行して行く訳ではないのである。

物語の冒頭で数頁にわたり主人公Louと夫Ricoの関係を述べる書き出しはロレンスらしい含みのある見事なものである。皮肉で喜劇的な語り口調への作者の才能をしのばせ、読者にこの物語に対する期待感を抱かせるに十分な内容を持っている。長編小説らしい奥行きを予感させる力を内包しており、ロレンス自身これを長編のつもりで書いたのかも知れないと思わせる。

Mrs WittとLouise Carringtonはイギリスを嫌悪しながらも、その上流社会に身を置いて誇りを抱いているという矛盾した生活を送っている母娘である。アメリカには落ち着かずヨーロッパの諸都市を駆けめぐっているコスモポリタンで、根無し草的生活をしている。

Lou Witt had had her own way so long, that by the age of twenty-five she didn't know where she was. Having one's own way landed one completely at sea. (p.21)<sup>1)</sup>

特に娘のLouは一切のものから手応えが失われたと思っている。思い通りに行動しても、万事が欲する通りに、抵抗が少なく運ばれるという不幸に見舞われている女性であった。諸外国の都市や諸外国語にも通じていて、何処にいても落ち着きを感じるが、何処にいても密かな疎外感から離れられない。とりわけ生まれ故郷のアメリカは異国中の異国となっていた。実際故郷と呼べる土地は何処にもないのであった。

生活の本拠がはっきりしないという点では夫Ricoもほぼ同様であった。彼はオーストラリア人で、従男爵であるメルボルンの官吏の一人息子であった。将来Sir Henryとなる筈のRicoは父から少額の送金を受けながらヨーロッパ中を放浪して歩き、芸術家稼業をやっていた(was being an artist.) (p.21)。美男子で、身のこなしは優美で上品であった。また人には親切で、いたわってやるのを生活方針としており、細心でよく気が付き、特に自分の未来、社会的地位に気を遣っていた。しかし、貧しかったので必死になって儉約したが、それにも拘わらず突然に浪費に走ってしまうことがあったり、深い感謝の念を抱いている人に対して

忘恩的なことをすることがあった。また柔和で優美な態度を見せているかと思うと、急に不作法になったりするのである。芸術家稼業をしている者にありがちなボヘミアンの無頼で落ち着きのない性格が表面上の優雅さや愛想の良さの下に隠されていた。

見かけは華やかなこのような2人が恋愛をし、初めは順調に楽しくやっていたが、次第に相手の神経を痛めるようなことをして、Louは病気になり、Ricoと別れてしまう。しかし、互いに離れることのできない2人は再会し結婚する。Ricoは肖像画家として相当に流行し、夫婦は社交界で目立つ存在になったがその内部には入って行けなかった。どこまでも放浪芸術家のような存在 (the drifting artist sort) (p.23) としてしか受け入れられなかったのである。こうした夫婦の生活状態で、ヨーロッパ世界、ひいては世界中で 'outsider' ともいうべきLouや「芸術家をやっている」と描写されるRicoを通して、現代文明に対する作者の痛烈な意識が意図されている。

このようにLouとRicoとの結婚は彼女が根無し草という精神的に不安定な状態から抜け出す手段とはなっていない。悪いことにはLouの自ら気付いていない「孤独」に更に拍車をかけることとなっている。Ricoは夫婦の生活を豊かにしたり妻の心を満足させることもない。何の手応えも妻に与えない。夫婦の真の結び付きを互いに求める努力もしていない。このような夫婦は互いに好いてはいても一緒に生活するだけで、相手の存在が無害とはいかなくなる。相手の神経を害し、ひどく疲れさせてしまうような関係に陥ってしまうのだ。

Lou and Rico had a curious exhausting effect on one another: neither knew why. They were fond of one another. Some inscrutable bond held them together. But it was a strange vibration of the nerves, rather than of the blood. A nervous attachment, rather than a sexual love. A curious tension of will, rather than a spontaneous passion. Each was curiously under the domination of the other. They were a pair — they had to be together. Yet quite soon they shrank from one another. This attachment of the will and the nerves was destructive. As soon as one felt strong, the other felt ill. As soon as the ill one recovered strength, down went the one who had been well. (pp.23-24)

愛し合っても、血液の震動の絆、性愛、自然発生的な情熱を避け、神経の震動の絆、神経的な愛着、意志の緊張などの作用で結び付いている2人には真の男女の結び付きは存在しない。そこにあるのは一方が強くなると他方が弱くなり、弱い方が力を回復すると強かった方が弱るという力関係だけである。

互いに傷付かない関係になるために、2人は友人関係のようなものになり、プラトニックになっていった。性(セックス)は破壊的な消耗的な働きをするのでこれを避けるようにな

った。これでこの結婚が続く限り馴れ合いと「プラトニックな友情」が持続することになる。ロレンスの作品では、当然問題はそこで終わりではない。この時点から、ある得体の知れない落ち着きの無さが2人の関係の基調として姿を現し苦しめて行く。血縁関係の無い男女の関係が友人とか兄妹とかの関係になった時、互いの神経は擦り減り、破壊的に作用することになる。事はLou夫妻の思惑と反対方向に進んで行くのである。これは他のロレンスの小説に頻繁に登場する主題である。

落ち着きの無い結婚生活を送っている主人公LouとRicoの間に、彼女の母親Mrs Wittが恐るべき破壊的な活力をもって、何の前触れもなしに割り込んで来る。それによって夫婦の不毛な関係の底に蟠っているものの正体が明かになって行く。彼女は本来の場所を得た(Being on the spot.) (p.23) ようにLouとRicoの側に居座ってしまう。Ricoにとっては甚だ迷惑であろうが、彼女の途方も無い活力に任せてのプロットの展開にとっては大変有効な存在となっている。Mrs Wittは薄気味悪い程エネルギーと破壊力のある感覚の持ち主で、広大且つ危険なアメリカの無気味さを内部に蔵している。“They take their love like some people take after-dinner pills.” (p.23) と言って当今の男性を嘲笑するのを仕事にしているような50歳の女性である。洗練された、繊細な知性を持つ知識人タイプが、現在どこにもあふれていて、そのような人間の上辺だけの薄っぺらな能力など彼女は踏み付けて粉々に打ち砕いてやりたいと思っているのである。真の男は一体どこにいるのか、真の男に今まで出会ったことがないと苛立たしい気持ちに捉えられている。男が男であることが現代程重要な意味を帯びる時代がかつてあったであろうかという思いから離れられない。

Mrs Wittはアメリカ女性の意志的で破壊的な生命力を極端な形で体現している。自意識が強く破壊的な性格を持つ女性はロレンスの最も嫌う存在で、第一に彼の批判の対象となるべき人物であるが、この作品では彼女をイギリスの社会に対立させる役割を与えている。イギリスを含むヨーロッパ文明への彼の徹底した批判意識の捌け口としているのである。

Mrs Witt母娘をコスモポリタンで根無し草的生活を送るアメリカ人と設定した作者の意図は、自分のイギリス憎悪の気持ちを直接に反映させるためにイギリス人を使ってあからさまに母国嫌悪の態度を取らせるのは余りにも作為的と取られる危惧の念があったからであろうことは想像に難くない。更にイギリス人にイギリスを捨てさせることは当人を真の根無し草的存在に追い込んでしまう危険性があり、そのままどこかに漂流して行ってしまう可能性がある。ロレンスは今は漂流しているMrs Witt母娘を最後にはどこかに漂着し定住させることを意図しているのである。アメリカ人のMrs Witt母娘なら何の抵抗も無くイギリスを嘲笑し嫌悪し、簡単にイギリスを捨てて、母国に戻る事ができるのである。尤もこういう母娘が中心的人物ではイギリスを舞台に物語を発展させることは難しいであろうし、本作品が長編らしい出だしを以て始まっていても長編になりきれない中編で終わっていることも理解

できる。作者ロレンスのイギリス憎悪の念は強く、物語全編にわたって嫌悪の気持で塗りつぶされている。

ロンドンで結婚生活を始めた娘夫婦の一部始終を Mrs Witt は傍観者的な立場で、「無気味な精力と恐るべき理解力とを持つ、身なりの良い力強い悪魔のように、垣根の外からでも見るように」(p.24) 見ていた。余りものを言わなかったが、「僅かばかりの、時には嘔み付くような言葉はこの家庭に対する彼女の侮蔑の態度を露骨に見せていた」(p.24)。Mrs Witt の批判的な眼差しはじわじわと夫婦の調和の取れないギクシャクした関係に染込んで行く。母 Mrs Witt は善し悪しは別にして、陰に陽に娘 Lou に影響を与え、娘は次第に自分の「内なる動物としての本性」に気付くことなしに結婚してしまった未熟なる自分を意識するようになる。即ち、夫の Rico に対して懐疑的になって行くのである。Mrs Witt は自らの生活態度を通して若い夫婦に少しずつ影響を与えて行き、結局 2 人を離別に導いてしまう。

ロレンスが描く、Mrs Witt のようなエネルギッシュな白人女にはどこか共通点がある。彼女らは一様に自我が強く独善的で謙虚さに欠けている。Mrs Witt もこの系譜を引く女性で、その性格上後悔とか懐疑とかという言葉は見当たらないと言って良い。自分が正しいと思ったことはしっかりとやり遂げるが、傍目にどう映っても後悔することはないという性格である。戦争の後半フランスのアメリカ赤十字で看護婦を務め、大いに活躍をした。その際、戦争の廃墟でナバホ・インディアンの母とメキシコ人の父を持つアメリカ人と出会い、廃人のようになったこの男を回復するまで看護した後、Phoenix という名前を与え、農場で馬の世話をさせることにした。そして今 Mrs Witt は Phoenix を馬丁として連れ、ハイド・パークのロットン・ロウで乗馬を楽しんだり、乗馬姿で颯爽とピカデリーを歩き、行き交う人々を鼻であしらう風情を示したりしていた。アメリカ女性の典型的なエネルギーで成功を収めた Mrs Witt は母として、逞しい大人の独立した女性の手本として Lou の前に君臨している。一方何ら特別な才能があるわけでもなければ、一生保証された身分でもない、中途半端で何時暮らしている大地が崩れないとも限らない Lou 夫妻の生活は不安という砂地の上に築かれている。この現実を前にして、Lou は強い母に無意識の内に影響を受けている。

Mrs Witt は何かにつけてイギリス嫌悪の念を禁じ得ない。

There she was, with her grey eagle eye, her splendid complexion and her weapon-like health of a woman of fifty, dropping her eyelids a little, very slightly nervous, but completely prepared to despise the *monde* she was entering in Rotten Row.

In she sailed, and up and down that regatta-canal of horsemen and horsewomen under the trees of the Park. — And yes, there were lovely girls with fair hair down their backs, on happy ponies. And awfully well-groomed papas, and tight mamas who looked as if they

were going to pour tea between the ears of their horses, and converse with banal skill, one eye on the teapot, one on the visitor with whom she was talking, and all the rest of her hostess' argus-eyes upon everybody in sight. That alert argus capability of the English matron was startling and a bit horrifying. Mrs Witt would at once think of the old negro mammies, away in Louisiana. And her eyes became dagger-like as she watched the clipped, shorn, mincing young Englishmen. She refused to look at the prosperous Jews. (pp.25-26)

イギリス上流階級の普段の生活の一面を切り取って、何かにつけて辛辣な Mrs Witt は悪意を以て眺めている。一般的に落ち着きのある身だしなみの良いイギリス上流社会が、アメリカ・ルイジアナの人々と比べられて観察され、窮屈な浮薄さが強調されて軽妙にしかも鋭く突かれている。作者ロレンスの意図の露骨な反映として Mrs Witt はイギリスの社会にあからさまに対立するような振る舞いに出る。馬丁の Phoenix を連れて不敵な様子でハイド・パークを乗り回す。彼女のその姿は馬上のイギリス人の男女の胸にピストルを突き付けて、*'Your virility or your life! — Your femininity or your life!'* (p.26) と迫っているように見えた。Lou は Mrs Witt の派手な行動を見て困惑し体面を保つために自分も馬を買って母親に付き添わなければならなかった。Lou の眼にはどう映ろうとも、Mrs Witt のこの行為はイギリスにおけるヨーロッパ文明への彼女の強力な批判的意識の表れであり、ロレンスの意図するところの文明対本能的生命というモチーフの導入となる行為である。強引で力強い Mrs Witt がいなければこれから先 St. Mawr が登場することは難しいと言えよう。

Lou は母親との付き合いで乗馬を始め、最初は皮肉めいた楽しみを感じていたに過ぎなかった。しかしハイド・パークでの人目を引く乗馬という母親の行動は母本人が意識することなく娘 Lou に影響を与えていた。Lou の血の中に潜在していると思われるプランテーションへの郷愁が意識の上に昇って出て来る。自分にとり Rico が何者であるかを識る過程において、Lou はその中枢に何か欠落していると思い始めるのであるが、生命力の源泉となる何物かを馬の中に見るようになる。上品な家で Rico と暮らしていることや社交界との様々な結び付きは全て夢のように感じ、もっと実体のあるものは、ウェストミンスター の栗毛の馬と馬小舎であるということが分かった。と言うのも、Lou の驚いたことに、家の裏にある馬小舎と持ち馬に突然 *'a funny little nostalgia'* (p.27) を感じるようになったのである。勿論、この突然の感情の表れの理由付けとしては如何にも見え透いているが、何れにしても St. Mawr が登場する布石、前触れとなっており、Lou の気持ちはこの方向に向かって進み、2度と変化が起こることはない。

突然現れた美しい栗毛の馬に Lou は一目で魅せられてしまった。St. Mawr という名のこの

馬はRicoに無いか、また有ったとしても見かけ倒しの彼からは感じられない、彼とは懸け離れた世界を持っているので、それに魅了されてしまったのである。St. Mawrを買い入れる直接の動機は、Ricoをこの美しい馬に乗せるためであった。更に推察すれば1つには美しい夫と美しい馬という美しいものを取り合わせる喜び、もう1つは既にRicoには全く欠けてしまっている動物的本能を内に十分に秘めているSt. Mawrに彼を組み合わせるという興味がこの動機に含まれよう。

Lou at once decided that this handsome figure should be Rico's. For she was already half in love with St. Mawr. He was of such a lovely red-gold colour, and a dark, invisible fire seemed to come out of him. But in his big black eyes there was a lurking afterthought. Something told her that the horse was not quite happy: that somewhere deep in his animal consciousness lived a dangerous, half-revealed resentment, a diffused sense of hostility. She realised that he was sensitive, in spite of his flaming, healthy strength, and nervous with a touchy uneasiness that might make him vindictive. (p.28)

LouとSt. Mawrとの出会いは文字通り啓示と言うべきであろう。母親のように馬丁を従えて大通りを乗り回すことが最終目的ではなかったLouは母のように現実社会をもろに否定し、自分の殻の中に閉じ籠もる程頑なではなかった。心の底であがいていた何か満ち足りないものがSt. Mawrに対してこのような反応をし、理解を示したのでであろう。Louは母のように現実を切り捨てて生きて行くことはできなかった。そうすることは本当の精神の「死」であると知っていたからである。「危険な、半ば姿を現した憤懣、あたりに撒き散らされる敵意」を抱いたこの種馬は明らかに現代文明に囚われたものである。文明に抑圧されて、本能的生命を発揮できないでいる不幸にLouは無意識に共感している。St. Mawrが全身から発現する非社会的・非平均的存在という「暗い光」にLouは敏感に反応しているのである。この種馬は人間関係の瑣末さと浅薄さをいやが上にも明らかにしてくれる。

LouはSt. Mawrと初めて対面した時、「古い理解」(an ancient understanding) (p.30) が洪水のように彼女の魂の中に流れ込み、衝撃のような感動を受けた。彼女の乾いた石のような心が動かされてさめざめと泣くのであった。滅多に泣くような女性ではなかったのだが、

But now, as if that mysterious fire of the horse's body had split some rock in her, she went home and hid herself in her room, and just cried. The wild, brilliant, alert head of St. Mawr seemed to look at her out of another world. It was as if she had had a vision, as if the walls of her own world had suddenly melted away, leaving her in a great darkness, in

the midst of which the large, brilliant eyes of that horse looked at her with demonish question, while his naked ears stood up like daggers from the naked lines of his inhuman head, and his great body glowed red with power. (pp.30-31)

Louは今までどのような男にも、この馬が彼女を見詰めるような眼で見詰められたことはなかったと思う。St. Mawrの「大きな輝いた眼」はLouが日常の平凡な人間であること、Ricoの妻であること、サーの称号を持つ絵描きの奥様young Lady Carringtonでいることを禁じているようだった。LouはSt. Mawrと出会った後夫から身を遠ざけるようになった。

夫の中心部には男の代わりに「無力」が陣取っているのだと思うようになる。彼の存在の中枢が無力だという有り様は「一種冷酷な危なっかしい不信の念」と一体となっていて、その外貌は気遣わしい愛情、深い自制心、現代的紳士風な親切心、本当の世間的伶俐さを備えていた。だが、それは要するに「虚勢」(a bluff)であり、1つの「態度」(an attitude) (p.32)に他ならなかった。そしてLouは男でも女でも、何か欠けるものがある時のみあらゆるものが態度になることを理解した。何か欠けるから自分の工夫に寄り掛からねばならないのである。St. Mawrの眼の中にある黒い火のような流れは「態度」ではなく、唯一の真のものであった。その黒い火の流れが脅威と疑問の姿勢で闇の中から現れ、St. Mawrの素晴らしい身体となって燃え上がっているとLouは確信した。この種馬はLouにとって最早動物の馬以上の存在となり、彼女の理解し得る掛替えのない価値の象徴ともなったのである。そしてSt. MawrはRicoとの「態度」の世界に囚われたLouの正に対立物でありながら、彼女自身の反映でもあった。このことはLouの主観的意識との関連においてしか理解されにくいので、Mrs Wittを除く他の登場人物には理解されることはない。St. Mawrを見てLouはRicoとの「態度」の世界の偽りに目覚め、内的衝動に突き動かされ涙を流す。涙の場面は後に書かれる*Lady Chatterley's Lover*のConnieの同様な場面を読者に思わせるのはしばしば指摘されることであるが、根源的生命に触れて文明社会の偽りの生活に目覚めるのはロレンスの主人公に典型的な成り行きではある。とは言え、Louの涙の意味に共感できなければSt. Mawrの衝撃を十分に理解しているとは言えないであろう。

St. Mawrは英国の文明社会に対立している本能的生命を体現している。最早現代の文明では失われてしまったが、Louには望ましいあらゆる価値を表しているように見える。

With their strangely naked equine heads, and something of a snake in their way of looking round, and lifting their sensitive, dangerous muzzles, they moved in a prehistoric twilight where all things loomed phantasmagoric, all on one plane, sudden presences suddenly jutting out of the matrix. It was another world, and older, heavily potent world.



And in this world the horse was swift and fierce and supreme, undominated and unsurpassed.— “Meet him half way,” Lewis said. But half way across from our human world to that terrific equine twilight was not a small step. It was a step, she knew, that Rico could never take. She knew it. But she was prepared to sacrifice Rico. (p.35)

St. Mawrの住む世界は我々の世界とは別の世界で、ずっと昔の非常に強力な世界、恐らく古代ギリシャの英雄が知っていたような世界、有史以前の薄明の世界であり、そこで彼は敏感で崇高で、他から支配されることのない卓越した存在であったのだ。それ故昔の強力な世界で卓越していたSt. Mawrは無気力な現代世界では危険で脅威にもなり、邪悪な存在でもあり得る。現代の英国社会に欠けている一切のものを表すSt. Mawrは根源的生命のあらゆる発現となり得ると同時に、人に危害を加えかねない社会的脅威にもなり得よう。事実過去に2人の男に重傷を負わせている。しかし現代社会では上品なイギリス人たちにとっては、単に乗馬として危険な存在に過ぎず、そしてRicoにとっては単に格好な絵のモチーフに過ぎない。またハイド・パークでSt. Mawrに乗った時の自分の美しい乗馬姿を想像する対象に過ぎなかった。LouとRicoのSt. Mawrに対する考え方は天と地程も異なる。RicoはSt. Mawrと対蹠的とLouが思うのも当然である。

Ricoは背は高く、好男子で、物腰もしっかりしていた。面長ではっきりした輪郭をしており、髪は額から真っ直ぐ後ろに撫で付けられていた。汚れているとか髭が剃られずに伸びているとか、顎髭や口髭を付けているとかは想像できない顔をしていて、完全に社会生活目的のためにこしらえられている顔と言って良かった。「洗礼者ヨハネの首のように切り落とされていても、彼の首はそれ自体完全なもの」であったし、申し分ない服装で、唇に到っては「ぞくぞくと接吻をそそる唇」(p.34)であった。これは戯画以外何物でもない。ロレンスが使用人Lewisの視線を通して暴くRicoの姿はロレンスの嫌悪する男の見事な一典型である。

外面的な完璧さとは裏腹にRicoは怒りを内攻させ、鬱屈した怒りによって感情が麻痺させられてしまう。怒りの内攻と鬱屈によって麻痺させられた人間は挑発的な「爆発」を怒りの唯一の表現形態とするに到る。そして、内面と外面の途轍もない乖離、その結果生ずる外面の絶対化を支える装置が自制である。しかし、自分の無力を隠そうという意図とする自制は当然早晚崩れることになる。その時の怒りは発作的な性質を否応なく帯びて、その不毛さ加減を暴露せずにはおかない。Ricoの場合も同様である。この爆発を怖れて自制している。

He daren't quite bite. Not that he was really afraid of the others. He was afraid of himself, once he let himself go. He might rip up in an eruption of life-long anger all this pretty-pretty picture of a charming young wife and a delightful little home and a

fascinating success as a painter of fashionable, and at the same time “great” portraits: with colour, wonderful colour, and at the same time, form, marvellous form. He had composed this little *tableau vivant* with great effort. He didn't want to erupt like some suddenly wicked horse — Rico was really more like a horse than a dog, a horse that might go nasty any moment. For the time, he was good, very good, dangerously good. (p.27)

彼の生涯の怒りというのは野心のために自らを貶めている怒りである。Ricoは原始的闘争本能に欠けるところがあった。この種の本能の欠如により、半ば幸運によって手に入れた成功を積極的に更なる成功に導こうという意欲よりは自らを抑え貶めることによって、成功した現在の状態を維持しているのである。

Ricoには原始的本能により藪を怖れたり、Lewisの薄い灰色の眼に凝視されてびくびくしたり、民主的な植民地やアメリカで見られる男達の剥き出しの本能に怯えたりするところがあった。自分には大きな財産も、確固とした地位も、何の後ろ盾もなく、あるのは従男爵という名誉だけという状況で、究極的には1個の男として自分の価値の判断を人に委ねなければならぬことを痛い程よく知っていた。不安定な身分、そのため全ての使用人に思うままにされる無防備な男対男の対立はRicoの神経を逆撫でし、苛立たせた。その上彼は芸術家でもあったので、繊細で、一種絶望的な気持ちでそれに耐え、恨みがましい憤怒に駆られた。自分の身を自分1人で維持していかなければならぬ。それが植民地の極端な民主主義の中で生活して来たRicoの骨身に徹して悟った身の処し方であった。彼の弱さにはその裏にこのような悲劇が隠されていたのである。

内面に確固たる信念や自信のないRicoの言動は全て希薄な存在感しか与えない。彼の言葉は置かれた状況に対する気分の反応から気紛れに出て来るし、行動も同様に周囲の状況に翻弄された根無し草的軽薄なものとなっている。

このような夫Ricoとの機械のバネに動かされて神経で結ばれているだけの生活、更には母Mrs Wittの虚しい一生、単なる表面の静けさと安楽を求めるだけのイギリス人達、こうした環境の中で、Louは物語の冒頭にあるように、「自分がどこにいるのか分からなくなっていた」。逆説的に言えば自分がどんなに難しい場所にいるかはっきり認識していたとも言えよう。困難な現状を打開するのに打つ手が無い、即ちどうしていいか分からないという認識が、St. Mawrと出会う前のLouの奥底にあった。虚無から虚無へ渡り移って行くMrs Wittのように、Louは自分がどう動いても虚無の壁にぶつかるしかないことを知っていたので、投げ遣り気味に、表面的には体裁を保って生きていた。

「リコに犠牲を払わせても」というLouの決意をもとにSt. Mawrは購入された。徹底的に戯画化されているRicoの生き方は筆致から推測しても、作者の思想から考えても、ロレンス

自身最も反発している筈である。Ricoは悲劇に到るレールに乗せられてしまった。St. Mawrについて自分の描く絵のモデルの対象くらいにしか考えないRicoはこの点でLouと対極にいる。あれ程乗馬を嫌い、St. Mawrを嫌悪していても、美しいSt. Mawrに乗ってハイド・パークで自分の美しい姿を引き立たせたいRicoは自分の乗馬姿への虚栄心をくすぐられて、LouとMrs Wittの思惑に乗せられ馬場に出る。ここハイド・パーク、ロットン・ロウでMrs Wittのちょっとした悪意がSt. Mawrの騒動を引き起こした。作者はこの騒動でRicoへの報復を楽しんでいるふしがある。勿論騒動は衆目を集め、Ricoを困惑させ、面目を失わせた。しかし、これはRicoの体現する文明社会への完全な復讐となっていない。作者の悪意ある場面設定にも拘わらず、このような状況で突発的に姿を現した根源的生命の不可避的な現れと見える。普段は外面に出て来ないで潜在している根源的本能が突然火山のマグマの如く表面に噴出し、それを抑えるのに現代文明とは近からぬ距離を置いているPhoenixによってやっと事なきを得ているのは象徴的である。そしてこれはDevil's Chairの事件への前奏曲ともなっている。

このSt. Mawrの大立ち回りの後、場面はシュロップシャーのMrs Wittの別荘に移る。ここでMrs WittとLou夫妻がPhoenixやLewis、そして村人と交わる様が描かれる。Mrs Wittの別荘は教会と墓地の真ん中にあった。Mrs Wittの居間の窓からは教会墓地で行われる埋葬がよく見えた。彼女はそれを幾度か見ているうちに、無意味な死への恐怖を抱くようになる。この恐怖は彼女自身と、彼女が体現している自己本位で意志的な文明が辿り着く必然的帰結を示している。この物語の他の人物と違って人間的進展、唯1人その容赦ない自己認識の破滅的過程を体現し読者に示している。その意味では非常に輪郭のはっきりした人物像となっている。

シュロップシャーの部分はロレンスのモチーフの開陳の場となっている。Mrs WittがLewisの髪を刈る場面、CartwrightのPan神についての話、Lewisの'moon people'についての回想などが次々に出て来るが、それまで適度なテンポで進んでいた話が一頓挫を来たし緊張感を弛めている。イギリスの社会の描写も余りにロレンスの一方的な見方から書かれていて平板で実体を欠いている。しかし、ここにLewisとPhoenixという重要な人物が登場する。彼らは共に現代文明に犯されない神秘を内に持つ人間である。Ricoは2人の前に自分の存在の脆弱さを突き付けられて、周章狼狽する場面を演じる。彼らは男対男の緊張関係に耐えられる人間である。血筋から見てもヨーロッパ文明の外に安定した存在を保っている。両者共St. Mawrと親密な関係を結ぶ術とその扱い方を心得ていた。

LewisはSt. Mawrについて来たウェールズ出身の馬丁であるが、Mrs Wittとの関係が主として描かれている。Mrs Wittは気紛れにLewisの散髪をしてやった後、彼を魂の無い人間だと言う。

…just an animal! no mind! A man with no mind! I've always thought that the *most* despicable thing. Yet such wonderful hair to touch. Your Henry has quite a good mind, yet I would simply shrink from touching his hair. — I suppose one likes stroking a cat's fur, just the same. Just the animal in man. Curious that I never seem to have met it, Louise. Now I come to think of it, he has the eyes of a human cat: a human tom-cat. Would you call him stupid? Yes, he's very stupid.” (p.59)

Lewisの髪に触れてみたい気持ちになったMrs Wittはこの時は言葉で思考できない人間を軽蔑しているが、彼の神秘に本質的に魅入られている。後にMrs Wittは彼に求婚をして屈辱を舐めさせられることになる。

Mrs Wittの求婚の前に物語は大きな展開を見せる。皆でウェールズとイングランドの国境にある見晴らしの良いDevil's Chairと呼ばれる古い岩石群がある場所への遠乗りである。St. Mawrを嫌悪していながらもLouに促されて出掛けるRicoは、気の進まぬ馬の遠乗りなのに服装だけは一分の隙もなく身ごしらえをする。この馬の発する本能的生命の輝きを感知できず、ただ利用できる物としか扱わないRicoに対してSt. Mawrは最初から剥き出しの敵意を示す。「疑い深そうな狂気じみた輝きの燃え立っているその目の角からじっと見守り」(p.68)ながら、Ricoがその背に乗ろうとすると、前脚を上げ跳び退いた。RicoとSt. Mawrの両者が互いに嫌悪を剥き出しにしながらも、RicoはSt. Mawrに乗って遠出に出発する。

Mrs Wittの予想に反して、一行はAngel's ChairでなくDevil's Chairに到着する。この国では「悪魔の方が天使より高い席を与えられている」(p.73)と思われる程、Devil's Chairは高くて大きい岩であった。

They came …to where the knot of pale granite suddenly cropped out. It was one of those places where the spirit of aboriginal England still lingers, the old savage England, whose last blood flows still in a few Englishmen, Welshmen, Cornishmen. The rocks, whitish with weather of all the ages, jutted against the blue August sky, heavy with age-moulded roundnesses. (p.73)

それらの岩石に潜む悪魔を崇拝していた幾百万もの好戦的な祖先達が潑刺と生きていた頃を彷彿させ、野蠻であった頃のイギリスの土着の靈魂が未だ脈々と生きているようなこの場所は、既に時代を経て風化してしまっている。この虚ろで古びた風景を見てLouは、古い祖先が持っていた活力は失われてしまっていて、「私たちは余りにも永く続き過ぎた」(p.74)という感慨を抱いた。ここで重要なのは神の使いのAngelよりDevilに本能的生命力を見出し

ているのであろう作者は、この Devil's Chair にも、St. Mawr が顕現しているような、悪魔的活力が失われていることを示していることである。Angel = 光、Devil = 陰という簡単な図式をここで当てはめてみると、Angel = 光の側には「生きることの喜び」(joie de vivre) を謳歌する Flora Manby に代表される現代を史上最良の時代としてやまない進歩的な人々、一方 Devil = 陰の側には St. Mawr やこの種馬を上手く扱える Lewis や Phoenix のような本能的生命を未だ維持し得ている人達と類別できよう。一方、Lou は現代文明にどっぷり漬かっていて生きてはいても、その祖先達に比べると生きている、否、存在しているなどとは到底言えない。楽しく愉快に過ごすことは、遂に我々から真の生を奪い取ってしまったと考えている。一行は Angel's Chair でなく Devil's Chair に来て、「針の目」から景色を覗いて見た。

The Needle's Eye was a hole in the ancient grey rock, like a window, looking to England; England at the moment in shadow. A stream wound and glinted in the flat shadow, and beyond that, the flat, insignificant hills heaped in mounds of shade. Cloud was coming — the English side was in shadow. Wales was still in the sun, but the shadow was spreading. The day was going to disappoint them. Lou was a tiny bit chilled, already. (p.75)

この光景によって、外観は現代文明に立っているが、その内面は原始的本能に基づく生命を求めている Lou に変化が暗示される。「古代の血」を未だ残していると言われるウェールズ (Lewis も St. Mawr もウェールズ出身) には未だ日は当たっていたが、イングランド側は日陰になっていた。現代文明を代表するイングランド側の人間には Lou や Rico がいる。Devil = 陰に彼らは覆われ始めていた。Lou は少しばかり寒気もし始めた。事件の予兆である。直接表現をする Realism より直接的な象徴的イメージを好むロレンスの手法がここに使われている。

Lou の不機嫌な気持ちに呼応するように、St. Mawr が突然飛び上がり、後ろ脚で立った。爆発的な動作を示し、急に後ずりを始めたのである。驚いた馬上の Rico は荒々しく手綱を引き、馬は前脚を高く揚げ、やがて Rico を背に乗せたまま仰向けに倒れた。馬は青白い金色の腹を見せて、大きな首を痛ましく弓なりに曲げ、4本の脚で虚しく空間を蹴り始めた。Rico が手綱を握りしめ、決して離さないために、馬が彼の上に倒れて両者がもつれ合って藻掻く。その結果彼は一生足の自由を奪われ、肋骨も何本か折られる程の重傷を負った。また救出に駆け寄った Edward は顔面に馬の一蹴を受け、美男という評判を永久に失ってしまう。

St. Mawr が暴れ出してひっくり返えり、Rico の足を生涯不自由にするには2段階の過程があった。St. Mawr は道の脇に殺された毒蛇がいて、それを見て驚き突然暴れ出した。パニック状態に陥った St. Mawr は手綱を引いて無理に制御しようとした Rico の上に重なって倒れ

てしまったという訳である。Louはこの場面に悪の復讐と破壊の姿を見る。St. MawrとRicoという作者の思想のそれぞれの面を表す馬と人間は一体となって死んだ蛇の側をたまたま通りかかる。この場合、生きた蛇が突然に出現して馬が驚くという読者の注意が蛇の方に向いてしまい、蛇の姿の印象が強くなり生々しくなる可能性が高い。すると、この場合の馬と人間との象徴性が弱まることになる。ここでは蛇が水を飲んでいるところを石で頭を砕かれたとすることで、蛇が生命維持のための基本的な無意識的行動の真っ只中に生命を絶たれたということになる。正当な闘いでなく、卑怯な不意打ちで生命を失った蛇を示すことで、人間と馬との憎悪の衝突の陰湿で不気味な緊張関係が強められている。

Ricoがひっくり返った馬の手綱を決して離さないのは人間の意思の執拗さを象徴しているよう。表面的には平和そのもの、楽しさそのものの状態を保つのだという意味である。しかし、面と向かって他人を傷付けることは一切行われぬが、裏では密かに着々と傷付けることが進行している状態がその意思の実体である。平和や楽しさだけを追い求める軽薄な現世を維持しようとする人間のエゴの働きを蹂躪しようとする宇宙の神秘の悪がSt. Mawrののたうちまわる姿の中に象徴されている。また馬に振り落とされてその下敷きになっても手綱を離さないRicoの無能な騎手の姿の中には、原始の生命を失ってそれに気付かない無自覚な人間のエゴの悪が象徴されている。St. Mawrはその意思を強制されたために反抗したのである。

LouはRicoのために近くの農場へ気付け薬をもらいに行く途中、名状し難い憂鬱に襲われる。「心の疲労は彼女を一種の無感覚の状態に陥れていた」(p.78)。倒れて凄まじい形相でのたうちまわるSt. Mawrと、馬と倒れても手綱を離そうとしないRicoとの恐ろしい姿だけでも彼女にとって大きな衝撃なのに、頭を砕かれて青白い腹を覗かせて死んでいる蛇の不吉に動かない姿は、更に彼女に暗い打撃を与えたのである。対立する馬と人間の生の衝突に無残な無言の死の姿の底知れぬ不気味さが底流として重なり、Louの見た悪の幻想の激しさが生まれている。死んだ蛇についての視覚的描写はLouが衝撃的な悪の幻想を見る直前の彼女の姿を描くものとして極めて効果的なものとなっている。

And she had a vision, a vision of evil. Or not strictly a vision. She became aware of evil, evil, evil, rolling in great waves over the earth. Always she had thought there was no such thing — only a mere negation of good. Now, like an ocean to whose surface she had risen, she saw the dark-grey waves of evil rearing in a great tide.

And it had swept mankind away without mankind's knowing. It had caught up the nations as the rising ocean might lift the fishes, and was sweeping them on in a great tide of evil. They did not know. The people did not know. (p.78)

人類は自分達が「悪の大潮」に押し流されていることに気付いていない。ただ善良であろうと欲し、あらゆるものを面白く、享樂し得るものにしようと望んでいただけなのだから。この巨大な悪は善と対をなすような悪ではない。宇宙の絶対的存在としての悪と言える。そして人間の歴史というのはこの絶対的悪が覚醒し次第に力を増して行き、人間を破壊に導く過程と言える。現代に於いて具体的には、この世の全ての表れは根源的生命から己を偽る限り自己保存のための企みであり、悪である。個人、社会、新聞、あらゆる政治制度、死を退けることによる生存の果てしない増殖など全てが恐怖への突進、おぞましい混沌への回帰と言えよう。これを解決するためには何をすべきか。

The individual can but depart from the mass, and try to cleanse himself. Try to hold fast to the living thing, which destroys as it goes, but remains sweet. And in his soul fight, fight, fight to preserve that which is life in him from the ghastly kisses and poison-bites of the myriad evil ones. Retreat to the desert, and fight. But in his soul adhere to that which is life itself, creatively destroying as it goes: destroying the stiff old thing to let the new bud come through. The one passionate principle of creative being, which recognises the natural good, and has a sword for the swarms of evil. Fights, fights, fights to protect itself. But with itself, is strong and at peace. (p.80)

「砂漠に退いて、そして戦う」。これ以外にLouの平安を得る道はない。彼女はこの言葉通りにイギリスを逃れてニュー・メキシコの砂漠に退くことになる。このSt. Mawrのストーリーは人物間のドラマは殆ど無く、Louの思想上の発展に辛うじてドラマらしきものが見出せる。あらゆる価値の瓦解とも言うべき、この出来事後、St. Mawrは生命の輝きを失い幾分抑圧された感じになってしまう。地に堕ちた偶像のように何の光輝も発しなくなってしまったSt. Mawrは、これ以後射殺されるか去勢されるかというVyner牧師等のイギリス人達の悪意からLouとMrs Wittによって守られるべきものとなる。ここに於いてLouとSt. Mawrの本質的關係は終息するのである。Louが本能的生命の輝きを求めて仕えようとしたSt. Mawrが一転してただの雄馬としてLouの庇護される者となってしまった。このようなSt. Mawrの顛末は彼の衝撃的登場と比して困惑すべきものであるが、この種馬にLouが魅せられた時に既に複線が張られていた。前述のようにLouがSt. Mawrに初めて触れた時、ロレンスは彼独特の「古い理解」という言葉で人間の中で死に絶えてしまった太古からの生命がSt. Mawrの中に生き長らえていて、Louの生命がそれに呼応したことを示している。しかしその呼応は彼女の観念の中だけのものであって、彼女の生命の呼応がリアルに描かれているわけではない。即ち生命の交流の意識を彼女が感じたことが示されていると考えられるが、生

命は馬の方から彼女に向かって流れるだけで、それを受け取る彼女の生命の反応は描かれていない。彼女に生命が無ければ馬の生命を感得することはできないであろう。しかし生命は当然あるので、ここでロレンスは「古い理解」という言葉によってこの最初の接触をLouの認識の次元の事柄に抽象化していよう。この時St. Mawrは完全に抽象の世界に入ってしまうのである。そして、かつて人間の中にも存在したであろう宇宙の生命をLouに教えるための象徴的存在となるが、飽くまで象徴的存在を出ることはない。結果として、Louが自分の肉体に宿る生命を燃焼させる契機となるものではない。このように象徴性というものは実体のないものである。そこに射殺されるとか、去勢されるとかという甚だ娑婆臭い次元の現実が突き付けられ、この種馬から崇高な象徴性が剥ぎ取られ単なる種馬となり、物語の原動力を失ってしまう。それでアメリカの牧場に逃れたSt. Mawrは雌馬に秋風を送り、その尻を追いかけ回すような存在に墮してしまった。

St. Mawrの外にこの作品で本能的生命の存在を垣間見せる人物にPhoenixとLewisがいる。先ずPhoenixだがLouに馬と親密な関係を結べない夫Ricoの無価値性をより明確に意識させる役割を演じている。Louにとって、馬と親密な関係を結べるかどうか、人間の真価の判断基準となっていた。Phoenixは馬に乗るにも「自分と馬とがあたかも一体であるかのように馬に跨り」、「馬に乗ってそっくり返っている様子も見せず、裸馬に跨っているように」乗り、「その小さな暗い瞳の中には短剣の尖のような鋭い光が未だに絶えることなく輝いていた」(p.36)。彼の描写には人間に毒されない太古からの生命が暗示されている。これはLouがSt. Mawrを通して知り、アメリカの大地で見出したものと同じである。LouはPhoenixの醸し出す雰囲気注意到をそそられ、庭にいる時もPhoenixがいると愉快的心になり、Ricoといる時の神経の苛立ちとの相違を考えたりする。しかし、彼は既に文明の汚れを身に付けている人間である。他人から孤立しているLewisが持っている孤高の存在感や動かし難い自立した姿はない。また本能的に仕事の能力を身に付けてはいても、気紛れな要素が多く、Lewisのように黙々と使用人としての地位に安んじる強さはない。

Louにとって自分達に使われているPhoenixが真の男ではあり得ないが、

...the fact that one half of his intelligence was a complete dark blank, that too was a relief.

Strictly, and perhaps in the best sense, he was a servant. His very unconsciousness and his very limitation served as a shelter, as one shelters within the limitations of four walls. The very decided limits to his intelligence were a shelter to her. They made her feel safe. (p.137)



「完全な闇の空白」が知性の半分を占めるPhoenixは少なくともLouに安堵感と開放感を与えているのである。この闇の空白の存在がLouの心の中でPhoenixと「まだ生命の入り込んだことのない」アメリカ大陸とを結び付けている。ヨーロッパ世界にいた時はPhoenixはその深く静かな神秘をたたえていた特性でLouの関心を惹いていたが、アメリカ大陸に来るや否やそのヴェールは剥がれてしまい、子供のようにアイスクリームを喜んで食べたり、金持ちの白人女であるLouに寄生して生きようとする墮落した混血児という文明の臭みを内包した人間性を現してしまう。LouにとってPhoenixが持っていた意味が突然消滅し、反対の否定的存在となり、最後になって彼女が彼に男性的エゴを感じるのとは少々唐突の感を否めない。St. Mawrと同様に彼もLouがラス・シヴァスに到るための手段であるという面が露骨に見える。

一方馬丁のLewisはウェールズ出身で、背が低く、黒いフサフサとした髪と黒い顎髭を見事に蓄えた無学な男である。無論彼もSt. Mawrと親密な関係を結ぶ術を心得ている。社会的地位という背景に頼らなくとも独自に存在し得る一個の男である。人間の真価をたちどころに見抜く才にも恵まれている。彼が住むのは暗い沈黙の世界で、それは生きとし生けるものが自らの発する沈黙を身にまとい、孤独と神秘を保ちつつ棲息する世界である。そこでは肉体の尊厳が固く信じられている。人は流星から訴えを聞き取ることもできるし、樅の木はその葉で以てものを見たり聞いたりすることができる。Lewisはこうした神秘の世界の住人である。

こういう世界に住んでいるLewisは他の人間から切り離された独特な孤立感を備えており、Mrs Wittのように破壊的な本性を持つ女性にも触れることのできない神秘的な世界をその背景としている。それ故、Mrs WittにはLewisが唯一の真実の実在と思えた。

… what made him perhaps the only real entity to her, his seeming to inhabit another world than hers. A world dark and still, where language never ruffled the growing leaves, and seared their edges like a bad wind. … sometimes when Lewis was alone with St. Mawr: and once, when she saw him pick up a bird that had stunned itself against a wire; she had realised another world, silent, where each creature is alone in its own aura of silence, the mystery of power: as Lewis had power …. (p.104)

如何にMrs WittがLewisの実体を見詰めようとしても、実際は逆に見詰められているのは自分だと感じざるを得ない。娘のLouもLewisには自分が見透かされているという感じを抱く。Lewisにしてみれば決して意図的に見詰めている訳ではないが、別の世界に立った、孤立した神秘感と動物的な自足感とが彼をそう感じさせる。見られているという意識は見られる人

間 Mrs Witt と Lou に彼の世界に呼応できる要素が存在するために起きる現象である。Mrs Witt は Lewis の本質を感得しているのにも拘わらず、彼の持つ神秘感に猛烈な対抗意識を燃え上がらせ、精神力でそれに勝とうとする。精神を過大視して、彼の自立する肉体の存在を忘れてしまうのである。Mrs Witt が Lewis に求婚すると弱点を突かれ、「私の身体を尊敬しないような女性にはそれを与えることはできません」(p.111) と言って斥けられてしまう。彼によってヨーロッパ文明の精神的世界は拒絶されてしまう。Lewis は Phoenix のように変節せず一貫性を維持しているが、St. Mawr と共にテキサスに残されたままそれ以後姿を現さない。彼も St. Mawr や Phoenix と同様に Lou がラス・シヴァスに向かう道標の役割を担っているに過ぎない。Mrs Witt と Lewis との関係は物語の大きなドラマとなっているが、Mrs Witt は Lewis を知って生まれ変わるわけではないし、Lewis が夫人を蘇生させようという意志があるわけでもない。物語全体の質を変動させるようなドラマになり得ていないのである。

St. Mawr の去勢の危機を救うために、Mrs Witt は Lou と共に St. Mawr や Lewis, Phoenix を連れてアメリカ・テキサスに渡る。この旅はヨーロッパ文明の悪意から本能的生命を体現する St. Mawr を救出する作戦の体裁を取ってはいても、既に St. Mawr の本質的な意味が失われている以上意味は別の所にある。即ち St. Mawr に代わって、この馬が象徴していた本能的生命や真の生き方を示してくれる対象を探し求めるといふ、彼女の自己確立のための旅程の表現である。

Rico を代表とする Manby 夫妻や Vyner 牧師夫妻のような典型的イギリス中産階級から出た、St. Mawr を射殺するか去勢するべしという意見は、彼らの社会にとって危険な存在は悉く抹殺すべしということに繋がる考え方である。ロレンスはこの考え方を「去勢された」男性を理想的男性視する現代ヨーロッパ文明社会の明らかな反映とみなしている。危険なもの、即ち「力」を内在しているものを「公的な脅威」(public menace) (p.88) として排除することが人間的な行動であるとするのである。この考えを突き詰めて行けば、人間は人間的という名目であらゆる生を滅ぼすことができるということにもなる。太古に於いては勇敢で向こう見ずで、恐らくは残虐でさえあったろう人間は今文明社会の中ですっかり本能的生命力の影を潜めてしまった。それ故、力を秘めた危険な動物は絶滅されないまでも、St. Mawr のように屈服させられることになる。その姿を見て、燃え立つ高貴な炎を内に蔵した太古の人間、その太古の人間の危険な炎は現代の人間のどこに残されているのであろうか、St. Mawr もこうした太古の人間に仕えたとしたら、充足を味わったことであろうが、現実には取るに足りない現代の人間に仕える悲しさ、大きな悲哀をこそ表しているのではないかと、Lou は思う。

ヨーロッパ文明社会に住む人間達は、人道的、公共的に St. Mawr の去勢を主張する者達のように、博愛主義という文明化された感情、即ち精神頭脳にコントロールされた感情に基づいた行動をしている。これこそ「去勢」された人間に相応しい感情であるが、文明化され

た感情を一旦抱くと、真の信念を抱く能力を喪失することとなる。結果として、一種の「虚勢」(a bluff) が生の前面に大手を振って現れるに到り、現実は全て虚勢から成り立っているような観を呈するようになる。Louは生の前面に躍り出た虚勢を新たな忌避すべき野蛮と見なす。彼女はこの野蛮と戦い、戦いを通じて彼女自身の信ずる真の文明を開拓し、太古の世界を具現しようとする。この目的を達成するために、複雑極まりない新たな野蛮を繰り出している文明社会から離れ、原初の姿を維持し、問題を明快にしてくれるロッキー山脈の麓に辿り着く。当初Louはアメリカで求めるものが見付かると期待していたが、アメリカ人達の生活の陽気さと親しみに接すると、その背景にある無意味さに空恐ろしくなった。「鏡の中で演じられる人生のような」(p.131) アメリカ人の生活はLouの期待を粉碎してしまったために、彼女はニュー・メキシコの未開な山奥の牧場にまで新天地を求めて出掛けて行く。

しかしLouの辿り着いた地は安易な気持ちで立ち向かえるような土地ではなかった。強烈な開拓精神を以て初めて対峙できる厳しい自然が支配する土地であった。文明化された感情が起因する神経症的な苛立ちや無力感と不可分な虚勢に挑戦するのに適した土地でもあった。彼女の靈魂、彼女の正にその真髓に触れるものを持った男である「神秘的な新しい男」がやって来ない今、Louは1人でいて処女の巫女達のように「目に見えざる神、目に見えざる靈、隠された焰」にのみ身を捧げ「平安と満足」(pp.138-139)を得ることにしようと決心する。その決心が着いたところで「これこそ私が望んでいた場所だ」(p.140)と思うラス・シヴァス牧場に到着した。売りに出されているこの土地の山小屋を一目見て、心が弾むのを覚える。自然のままの馴らし難いように立っている松の林、荒廃した牧場、眼下に横たわる不動の荒野、遠くに見える青い山脈、全てが彼女の心を強く捉えたのである。

この土地は自然の力が猛威を振るっている、容易には人の力を寄せ付けない土地でもあった。「重々しくのしかかる巨大な泥土のような無力」(a great weight of dirt-like inertia) (p.140)に苦しんでおり、そこに近づく者に、聖なるものの対極にいる、そういう無力と、凄まじい闘いを予感させる土地であった。ネズミ、水不足、毒草、疫病、多発する雷など開拓者の意欲を殺ぐ障害が充満していた。

At one time no water. At another a poison-weed. Then a sickness. Always, some mysterious malevolence fighting, fighting against the will of man. A strange invisible influence coming out of the livid rock-fastnesses in the bowels of those uncreated Rocky Mountains, preying upon the will of man, and slowly wearing down his resistance, his onward-pushing spirit. (p.143)

ここでは少なくとも闘いを挑むべき敵は具体的で明確な姿を取って現れる。闘いの性質も曖昧でない。Louがイギリスで苦しんだ自らの内面的欲求とヨーロッパ文明社会との恐るべき乖離はここには無い。内面が常に外面と緊張関係にあり、聖なるものを守ろうとして無力と闘う行為が明白な使命として提示されている。

Louはこの牧場の3代目の所有者となる。ここには未開な自然に対する先住者の開拓の歴史がある。2代目の商人の妻の体験に作者は自らの意図を濃厚に込めている。このニュー・イングランド人の妻は牧場からの遠景の美しさに惹かれる。

It was always beauty, *always!* It was always great, and splendid, and, for some reason, natural. It was never grandiose or theatrical. Always, for some reason, perfect. And quite simple, in spite of it all.

So it was, when you watched the vast and living landscape. The landscape lived, and lived as the world of the gods, unsullied and unconcerned. The great circling landscape lived its own life, sumptuous and uncaring. Man did not exist for it.

And if it had been a question simply of living through the eyes, into the *distance*, then this would have been Paradise, and the little New England woman on her ranch would have found what she was always looking for, the earthly paradise of the spirit.

But even a woman cannot live only into the distance, the beyond. Willy-nilly she finds herself juxtaposed to the near things, the thing in itself. And willy-nilly she is caught up into the fight with the immediate object. (pp.146-147)

彼女は遠い砂漠や荒々しい山々の眺望の「絶対的な美しさ」に心を打たれる一方、「人間の高度な生活への企て」に対する自然の露わな敵意や、未開な生命の凶暴な繁殖力を相手に憑かれたように戦う。ラス・シヴァス牧場の描写はそれ自体が一個の独立した散文詩になるほど力強く見事なものである。ラス・シヴァス牧場はニュー・イングランドの女がキリスト教の教える魂の楽園を打ち建てようという悪戦苦闘を通して紹介されている。遠くより見た自然を真の自然と錯覚して近くに見る自然をそれに同化させようという彼女の過ちを通して、この牧場がLouにとって持つ意味を際立たせている。作者は自らの思想をSt. Mawrには抽象的にしか反映させていないが、ラス・シヴァス牧場では明確に述べている。遠景と近景を混同してしまう錯誤は、物それ自体の真の姿を見ようとしぬ精神の敗北を語っている。即ち、キリスト教的善が世界を支配するという思想の敗北を意味する。この宇宙はキリスト教の言う善や悪の捉えることのできない神秘に支配されていることを、このニュー・イングランドの女性は悟る。

*There is no Almighty loving God. The God there is shaggy as the pine -trees, and horrible as the lightning.* Outwardly, she never confessed this. Openly, she thought of her dear New England Church as usual. But in the violent undercurrent of her woman's soul, after the storms, she would look at that living seamed tree, and the voice would say in her, almost savagely: *What nonsense about Jesus and a God of Love, in a place like this! This is more awful and more splendid. I like it better.* (pp.147-148)

この牧場に存在するのは愛ではなく、「エネルギーに満ちあふれ、底流に野蛮な貪欲さを持った激しい怒り狂う生命」(p.147)であった。Louはこのような生命力、太古より存在する神秘の危険な力以外自分を救ってくれるものはないと考え、ラス・シヴァス牧場を安住の地として選んだのである。この牧場はSt. Mawrと違って象徴的存在ではなく、実際の生活の場となる具体的場所ではあるが、ニュー・イングランドの女性の苦闘を通してしか語られておらず、Louの精神状況を示すのに留まっている。Louとラス・シヴァス牧場との関係を示す具体的な描写はない。読後に残るのは彼女の精神の姿だけである。これではLouがこの牧場を経営するのに、彼女が逃げ伸びて来た墮落した文明から得たお金で運営を維持しても、精々数週間程度の彼女の潑刺とした精神の高揚を意味するだけとなる。

Louが最後までドラマの主演を演じることがないという作品の弱さが現れている。この作品を書いていた当時、ロレンスは自分の到達している思想を語ることしかできない精神状況にあった。その思想自体彼をそうさせるような内容を持ち、リアルな人間ドラマを描けず、積極的行動を示さない人物ばかりが登場する作品になってしまっている。彼の思想はLouの描写の中に語られるのではなくてLouを代弁者として語られているに過ぎない。ロレンスはこの作品で人間を創造したのではなく、思想を創造したのだと言われる所以はここにある。しかし、ロレンスがアメリカ大陸での体験とその敗北によってSt. Mawrの持っている弱点を十分に補う力を得て、この思想が晩年の*The Man Who Died*や*Lady Chatterley's Lover*などの重要な作品を生み出して行ったことを考えれば、大きな意味のある興味深い作品となっていよう。

註)

1) 本論文における引用文は全てThe Cambridge Edition: *St. Mawr*からのものである。

参考書誌

1. Finney, Brian (Ed.) : The Cambridge Edition: *St. Mawr and Other Stories*: Cambridge University Press: 1983.
2. The Phoenix Edition of D.H.Lawrence: *The Short Novels Vol. II St. Mawr*: William Heinemann Ltd.: 1968.

3. Cavitch, David: *D.H.Lawrence and The New World*: Oxford University Press: 1969.
4. Daleski, H.M.: *The Forked Flame*: Faber and Faber: 1965.
5. Hough, Graham: *The Dark Sun*: Duckworth: 1956.
6. Leavis, F.R.: *D.H.Lawrence; Novelist*: Chatto and Windus: 1967.
7. Moore, Harry T.: *The Intelligent Heart*: Farrar, Straus and Young: 1954.
8. ……: *The Life and Works of D.H.Lawrence*: George Allen and Unwin: 1951.
9. Niven, Alastair: *D.H.Lawrence: The Novels*: Cambridge University Press: 1978.
10. Pinion, F.B.: *A D.H.Lawrence Companion*: Macmillan: 1978.
11. Sagar, Keith: *The Life of D.H.Lawrence*: Eyre Methuen: 1980.
12. ……: *The Art of D.H.Lawrence*: Cambridge University Press: 1966.
13. Tiverton, William: *D.H.Lawrence and Human Existence*: Rockliff: 1951.
14. Worthen, John: *D.H.Lawrence and the Idea of the Novel*: Macmillan: 1979.
15. キース・ブラウン (編著) : D.H.ロレンス批評地図 : 松柏社 : 2001.
16. 井上義夫 : 地霊の旅 評伝D・H・ロレンスIII : 小沢書店 : 1994.
17. 倉持三郎 : D.H.ロレンス : 英潮社 : 1977.
18. 北沢滋久 : D.H.ロレンス : 墨水書房 : 1973.
19. 佐々木学 : D.H.ロレンスの文学と思想 : 松柏社 : 1980.
20. 西村孝次 (編) : ロレンス : 研究社 : 1971.
21. 羽矢謙一 : D.H.ロレンスの世界 : 評論社 : 1978.